

嶋田啓一郎氏(名誉教授)に聞く

同志社教育への期待

——ますます世界的に、
鮑くまで日本的に ——

聞き手

河野 仁 昭

同志社大学への道

——先生は、なにか動機があつて同志社大学へ入学なさつたのですか。

嶋田 わたしは福井中学校時代には小説家志望だったので。トルストイやドストエフスキーが好きで、早稲田大学に米川正夫というロシア文学の教授がいらしたので、早稲田を憧れていました。親戚の矢内原忠雄(元東京大学総長)の家に参りましたとき、またまたその恩師で国際連盟代表の新渡戸稲造先生が帰国されたところで、「これから会いに行くのだが、一緒に行かないか」と誘われまして、一緒に学士会館へ会いに行ったのです。

新渡戸先生は、嘗つて福井中学校へ講演にこられ、「クエーカーと世界平和」という講演をなさつて、わたしは強い感銘をうけたことがあつたのです。

——それと一緒に行かれたわけですか。

嶋田 そう。お会いしてお話してましたところ、先生は「早稲田へ行つて何を勉強するつもりなのか」と言われるのです。「宗教文学を学んで、小説家になりたいのです」と

お答えしましたら、「小説というのは小さい説のことなんだ、若い者はもっと大きい説について考えるべきだ。トルストイたちを尊敬するのならば、彼はキリスト教の本質に生きた人なのだから、君もキリスト教を勉強しなくちゃいかん。」先生はそう言われたのです。そして賀川豊彦先生を紹介して下さいました。

——賀川先生とは、そのとき初めて？

嶋田 賀川先生は伝道旅行ではいつも信者の家へ泊られ、福井へ来られましたとき、わたしの家へも泊つて下さつたことがあつたのです。『死線を越えて』などの三部作を書いておられた頃でした。相談に参りましたところ、「それなら同志社がいい、社会的キリスト教が盛んな大学だから」といわれまして、中島重、大塚節治両先生に紹介状を書いて下さつたのです。

——それで同志社に決められたわけですね。

嶋田 当初は考えてもみないことでしたが、そんなことで、昭和四年に同志社へ入学致しました。



嶋田啓一郎氏

賀川豊彦先生のかかわりあい

——大学を卒業されて、すぐ神学部の教員になられたんでしょう。

嶋田 「弁証法的神学における社会倫理の基礎」という卒業論文を書き、神学部の助手になったのです。当時の神学界ではバルトやブルンナーが有力でしたから、わたしはそういう先生の所へ行って勉強したいと願いました。ドイツ語を猛烈に勉強しました。ところが、留学を目前にして、昭和十二年、「キリスト教社会倫理」の授業中に咯血しましたね、それから七年半療養生活をしたのです。

——すると、終戦までですか。

嶋田 終戦まで寝ていたのです。療養中に当時、憲兵隊にいらまれて瀬戸内海の豊島に

蟄居中の賀川先生がよく見舞いに来て下さいまして「日本はこの戦争に必ず敗ける、だから今のうちに戦後の日本のための準備が必要だ」といわれるのです。歴史を洞察するまなこをもっておられる方には、先がわかるのですね。

——敗れたときの準備と申しますと？

嶋田 戦争が終わったら日本は民主化され、社会福祉や協同組合運動が重要になってくる、その勉強をしておくようにと言われたのです。

——昭和初年には同志社にも学生消費組合というのがありましたね。

嶋田 わたしもその組合運動に参加していたのです。もともと大学レベルの消費組合運動では同志社が日本で最も早かったのです。すでに明治三十年に安部磯雄先生が同志社に消費組合をつくられました、これが日本最初の大学消費組合だったのです。

賀川先生は日本協同組合運動の指導者でしたから、戦争が終ったらその全国組織をつくりたいと言われましてね、わたしはベッドに伏せたまま、社会福祉と協同組合論を併行して勉強をしたのです。

——敗戦後は健康はよくなりましたか。

嶋田 暫くは不調が続いていたのですが、昭和二十年九月に賀川先生は国際平和協会、十一月にはさらに日本協同組合同盟（のち連合会）を組織されました。その仕事を手伝って欲しいと言われるものですから、わたしも上京して、同盟の中央執行委員として働いたのです。

私は同志社の教職に戻りましたが、私の健康を懸念された賀川先生は、客員教授の資格で「協同組合論」の連続講義をして私を助けて下さったのです。

そんなとき、朝日新聞社が協同組合講座を催し、その講演に加った私は暫くは静養を余儀なくされました。賀川先生の要請で、先生に代って、いままで卅三年に亘って灘神戸生協の理事を引受けてきました。賀川先生の感化を抜きにしては、私の過去は考えられないのです。

社会学科の誕生

——新制大学への転換に当って、文学部は英文・文化・社会の三学科で構成されること



賀川豊彦先生

になりますが、社会学科は戦時中の文化学科
厚生学専攻の転身とみてよろしいのでしょうか。

嶋田 全くそのとおりです。もう少し詳しく申しますと、昭和六年四月に神学科の一専攻として、竹中勝男先生を中心に「社会事業学専攻」がつくられました、先に述べましたように、これは日本最初の大学レベルの社会学専攻の専攻だったのです。その後、戦時体制に入る昭和十六年に、文化学科が出来まして、それに編入され「厚生学専攻」と改称されたのです。

戦後、文学部社会学科へ改編されたとき、わたしは竹中教授を助け、その新編成に努力しました。大塚節治先生から、「文化学科の厚生学専攻になってからキリスト教的色彩が

弱くなってきた。キリスト教主義大学の特色を守る社会学専攻を進めて貰いたい」と言われたのです。

社会学科をつくるに際しまして、「厚生学」という名称は適当でないから、英国流のデパートメント・オブ・ソーシャルスタディースの内容をめざして、「社会学科」という名をつけました。わたしたちは社会現象研究に当って統合理論的方法論に馴染んでおりましたから、社会学という場合に隣接諸科目との深い関係に着目していました。社会学専攻や新聞学専攻と共に一学科をつくることによつて、社会学専攻に広がりをもつことができると考えていたのです。

——社会学科設立の中心は、やはり竹中先生ですか。

嶋田 そうでした。それから小松堅太郎先生などをお迎えすることになったのです。

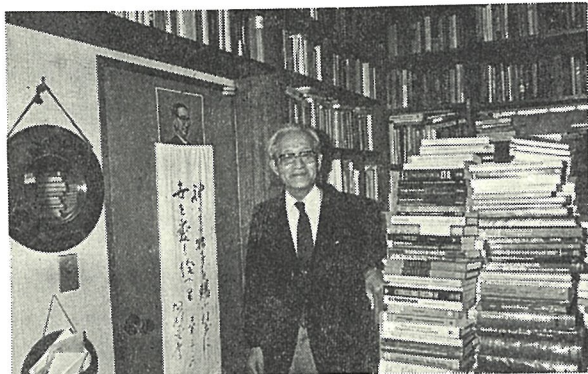
そうして陣容も徐々にとのつて参りましたとき、日本社会党から竹中先生に衆議院選挙出馬の要請を申し越されました。わたしはそれには絶対反対でありました。「社会学科はこれからの重要時期となるので、その中心人物である竹中先生に去られることは大打撃

である」と主張したのです。それで、その話は一応終わったのですが、今度は参議院選挙に出られることになったのですね。

国際主義の体験

嶋田 私のシカゴ大学留学中に竹中先生の当選が決まってしまいました。私がシカゴへ留学した一九五二年頃は、留学はむずかしい時代でしたが、新島先生と共に同志社をつくられたジェローム・D・デイヴィスのご子息で、エール大学の教授をしておられたデイヴィス・ジュニアのお世話で渡米いたしました。昭和十年に同先生は来日され、同志社で素晴らしい連続講演をなさったのですが、賀川先生を尊敬され、デイヴィス・賀川フェローシップ講座が設けられ、私とその講座担当者とし、キリスト教社会倫理学講座を受けもちましたので、深い関係ができたのです。

先生はニュー・ヘヴンに住んでおられましたが、シカゴへときおりこられて平和運動の講演などをなさいました。シカゴへ来られたときにはクエーカーのシカゴ支部長、ヴェリテイ医博の家へ泊られるので、わたしはこの医博と親しくなり、そこでクエーカー集會に加



鳴田名誉教授宅の書齋

わるようになったのです。
ところが、竹中先生が国会議員に当選されたので、すぐ帰国するようにと同志社から連絡があったのです。わたしは、元来、オックスフォードのG・D・H・コール教授のもとに移って、勉強をする計画で渡米したのですから、大変残念に思ったのです。デイヴィス

先生にその事情を報告しますと、デイヴィス先生の恩師シャーウッド・エディ博士の主宰の「ヨーロッパの声を聞くアメリカン・セミナー」という視察団への参加を勧められました。そのおかげで当時ヨーロッパの指導的な地位にあったアトリー、チトリー、あるいは文人T・C・エリオットなど、多数の著名人物とのカンフレンスを続け、それは私の人生観、世界観に、生涯に亘たる影響を与えるものとなりました。人間の問題を世界的な視野から総合的に思考する精神的規模の大きさは、それを現実に実践している人物に触れることなくしては、ただ書物だけではわからないものがあります。

この団体とスイスで別れまして、私はポール・ランデイス教授の「スカンジナビア生活研究グループ」に加わって北欧へ行ったのですが、スエーデンは協同組合運動の源流ですからね、いろいろ勉強になりました。それから英国へ戻りまして、オックス・フォードのG・D・H・コール教授のもとで三カ月間の研究を終えて、帰国したのです。

同志社と社会福祉

——同志社には社会事業の伝統があり、その分野の人材も輩出しておりますが、同志社における社会福祉教育の問題についてお話をうけたまわりたいのですか。

嶋田 社会福祉は経済的矛盾の中で貧困に陥っている人を救済することだと、狭く解釈する人がいます。確かにそれが重要な基盤であることは間違いではないのですが、貧困というものはもっと広い背景で考えなければならぬのです。

——と申しますと？

嶋田 私たちは、貧困を日常生活上の計数的貧困の他に、資源使用方法の貧困、感情とか感覚の貧困、言語、コミュニケーションの貧困、傾聴と学習の貧困、社会関係における差別的貧困など、一層総合的・人格的要素との関係で考えなければなりません。

——障害者の問題なども当然あるわけですね。

嶋田 そう。わたしはつねに、「全人的人間の統一的人格の確立」ということを申します、それが社会福祉の究極の目的なのです。その理解無くしては障害者福祉は成り立ちません。最近、人間理解における統合理論的把

握の重要性が認められるようになってきましたが、全人的人間の「全体」を統一するものは、「人格」なのです。人格的存在のクライマックスは正義と愛なのです。その正義と愛とは人権擁護の基礎となるのですが、それを確立することが、社会福祉の課題となります。そういうわけで、わたしは「人格主義の社会福祉」を学会などで訴え続けて参ったのです。

このことは、まことに同志社であると思うのです。同志社は「キリスト教主義教育」を目的としています。同志社は、その個性を固守しなければなりません。同志社が、もし「キリスト教主義」の理念を破棄するときはあるとすれば、同志社はそのときは解散すべしだとわたしは思っているのです。

国立大学をはじめ一般の大学は、科学を使命として、客観化認識を学の本質としています。文明建設には、それは重大・不可欠の役割を果たしてきました。しかし経験的事実の確定というだけでは、人間の生活実践の道は成立しません。それとともに実践行動の必須の条件となるのは、人間の価値判断なので、その社会的価値評価があるが故に、客観的に認識

された経験的事実の世界を動かしていくことができるのです。即ちマックス・ウェーバー流に言えば、「経験的事実の確定」と、「倫理的な価値評価」との統一されたところに人間の生活行動が成立するのです。

新島先生は、「良心を手腕に運用する人物」の育成を同志社の使命とされました、これはまことに含蓄の深い言葉なのです。手腕は客観的・科学的認識を絶対に必要とします。しかし、それを動かすのは「良心」なのです。「良心教育」を抜きにして大学教育が成立すると考えたところに、現代の大学の大きな誤りがあります。

——それは一般的な大学の場合ですね。同志社は「良心教育」も「キリスト教主義教育」も、少なくともその看板は降していませんから。ただどの程度教育の場で、いまそれが生かされているか、実践されているかとなると、問題は別でしょうが。

嶋田 同志社が絶対に譲ってならないものは、その「キリスト教主義」なのです。

——同志社の現状を、どうすればよいと、先生はお考えでしょうか。

嶋田 抹香臭いキリスト教ではなくて、そ

れをもっと現代的に生かすために辛苦すべきですね。新島精神にしましても、それを現代的に再検討していくのでなくてはならない、わたしが同志社で現職の教授時代を通して、つねに教室で語ってきたことは、そのことでした。

敗戦直後に、わたしは鎌田研一さんの著書である『新島襄人生読本』（昭和十三年二月）というのを再版することを考えました。そこには、大学のみならず、人間存在そのものを揺るがす活力が充滿しているのですからね。出版するにも用紙がない時代でした。賀川豊彦先生に相談しましたところ一万冊分融通して下さったのです。それで京都の全国書房から『わが人生』（二十一年六月）という題に改めて再版しました。人々が本に飢えていた時代でもありましたから、怒ち売り切れていました。新島精神を現代的な立場から見直して行くことが大事なのです。

真の一貫教育の確立

——同志社教育に関して、他になにか。

嶋田 「キリスト教主義教育」との関係において、一貫教育を徹底してやることです

ね。ひとたびエスカレーターに乗れば大学まで行けるという感覚を生徒に与えないで、私学同志社らしい人間訓練を、幼稚園、中学、高校すべての学校が徹底してやらなければ、一貫教育の意味はないのです。同志社は他の学校には見られないよい面をもっている、わたしは確信しています。そのよい面を一層伸ばすような一貫教育ですね、それを是非やらなければなりません。

——昔に比べますと、成績はよくなりましたが、その点は確かに十分でないように思います。どこに問題があるとお考えでしょうか。

嶋田 わたしは同志社監事の聖なる任務に携わる立場で、キリスト教主義の一貫教育の成り立つべき地盤づくりに取り組まなければならぬと思っています。問題は最高の責任者である総長の地位が低すぎる事です。逆にいえば各校の独自存在が強すぎるということでしょうか。同じ法人同志社の学校でありながら、他校のことには我関せずという態度が見られる、これは非常に残念なことです。

——よくわかりますが、歴史的な経過もご

ざいますから……。その問題と関連するところがあるかと思いますが、各学校がそれぞれ大きくなりまして、教育方法がそれに伴っていないという感じを受けますね、難しい問題だと思いますが。

嶋田 わたしは元来、大きくすることにあまり賛成ではないのです。寺小屋のようなものでもいいから、本当の同志社の意味での英才を育てたいというのがわたしの夢なのです。わたしの言う同志社英才というのは、社会福祉なら社会福祉を、真剣に良心と真心をもって学び、実践する人のことです。いまわたしは、大きいことそれ自体が必ずしも悪だと言うのではありませんが、質が溢れて量になるのでなければなりません。そのバランスを考えずに、ただ大きくすればよいという方針には賛成できないのです。

総合大学と学部との壁は？

嶋田 先ほども申しましたように、わたしは一貫して統合理論を学び、かつ主張してきたのですが、同志社は元来、統合理論的な考えをもっている大学なんです。此の間亡くなられました湯浅八郎先生も、「同志社に一番

期待したいことは、統合的な大学をつくることだ」と申しておられました。

ドイツにラルフ・ダーレンドルフ（現ロンドン大学スクール・オブ・エコノミクス学長）という著名な学者がいますが、彼は「第二次世界大戦が起こった原因は、大学の各学部が狭い専門領域の理論しかもちえず、人間全体を見ることが出来なかつたことにある」と申しまして、スイスとの国境コンスタンツに学部のない大学をつくつたのです。それが評価され、ボンの文部省次官にもなりました。学部の壁を越える学問の統合化は、いま世界的潮流となっています。人間観・世界観に基く統合化のなかで、専門的研究が新しく位置付けられるのです。

ダーレンドルフのハンブルグ大学における恩師エドワード・ハイマンという学者は、経済学者として人間の問題を特別大事に考えるスケールの大きい人物だったのです。そういう人物ゆえに、ダーレンドルフのような優れた弟子も生まれたのです。ハイマンは日本へ来られたとき、わたしの家へも数日泊つて下さって、大いに議論をしたことがあるのです。

国立大学などに比べますと、同志社大学の学部はたしかに低いと思います。しかし、もっと低くすべきなのです。そして、どの学部にも所属していても、他の学部の専門領域との関連をみることができ、それが総合大学の総合大学たるゆえんなのですから。

——並列的に沢山設置しているというだけでは、駄目なわけですね。

嶋田 それは並列であって総合ではないのです。壁の高い学部をいくら置いても、それだけではなお欠けるものがあると言わなくてはなりません。わたしは専門をなくしろと申しているのではないのです。専門を認めなければ学問の高さがなくなり、インテグレイティブの意味も失われるのです。ただ、それが単なる寄り合い所帯であってはならないのです。

それには、同志社の英才を育てるという問題と関連しますが、真に同志社教育の使命を理解し、それを積極的に推進して下さるような教員を、学園の内外に鉄のわらじで探すべきだと思っております。課目は必ずしも多くなくともいいのです。講座は少数でもいい、同志社の使命の本質を正しく理解し、情熱をもつ

て教育をして下さるような教員が欲しいのです。

同志社と国際主義

——身体障害者の問題とかいろいろお話をうかがいたいことがあるのですが、先生は国際主義についてどのようにお考えでしょうか、いまもよく外国へも出掛けておられるようですよ。

嶋田 社会福祉の重要課題としての障害者問題は、わたしが教授の現職の時代に十分やれなかったことで、いつも心にかかっているのです。盲学生友の会の顧問をしましたり、現在も大阪と京都のライトハウスの仕事はずつと続けております。定年退職後は一層多忙に働いていますが、決して十分とは言えません。

国際主義の問題でぜひ申し上げたいことは、お隣の韓国の事です。わたしは在職時代に、なんとか韓国の留学生を同志社で受けられるように、つねに努力して参りました。戦前には朝鮮の優秀な人たちは、同志社と早稲田に学んだのです、そういう伝統があります。

今の韓国は、留学などで国外へ出ることが大変難しい、特に日本政府は三十五歳以上の方の日本留学を認めていないので、米国へ行くのが普通です。わたしは法務省へも交渉に往復しましたが、好転しておりません。隣国の大切な年齢期の留学生受入れを拒んで、どうして国際親善が望み得ましようか。

——韓国の国情にも、困難な点があるわけでしょう。

嶋田 確かにそれはあります、政治体制に問題があると批判されているのは御承知の通りです。しかし、わたしたちはその反対を叫べば足りるのではなくて、向うの国の中へ入って貢献すべきだと思っております。先日、わたしは韓国の六つの大学で講演する機会をもちました。同志社の卒業生たちは、ソウル女子大学を創立した高文京教授、江南カレッジを創立した金徳俊教授をはじめ、多くの同志が、諸大学で実にいい仕事をしていきますよ。そのときの講演で、キリスト教の人間観を基礎とする健全なデモクラシー社会についてお話をしたのです。現実に対応しながら、つねに一步前進に役立つよう貢献しなければなりません。

実際に韓国へ参りまして人々に接してみますと、そこには日本人の理解の及ばない独特の精神状況のあることを悟るのです。朝鮮戦争で国土をめちゃめちゃに荒された国ですから、南北対立の現実のなから立ち直って行くには、日本とは又違った切迫した問題もあるわけです。彼らはいま、建国の時代だと考えているのです。韓国民の四割はクリスチャンで、五百名、千名の教会が当り前なんです。隣国でありながら、事情が正確に伝えられていないのは問題だと思えます。

——国際主義というと、すぐ欧米というふうに考える、これは明治の開国以来ですね。

嶋田 同志社がインターナショナルであるというとき、近くの国の人たちのことを考えないで、遠い国の人たちとの交渉のみを考えるとというのは、何かひとつ欠けたものがあるというべきです。国際的な視野、考え方、交流、それは極めて大事なことです。国際的というとき、つい隣りの国のことを正確に認識していないというのは、大いに反省すべきことではないでしょうか。たとえば同志社大学には朝鮮語講座を置いておりませんが、これは是非設置しなくてはならないと思いま

す。姉妹校として提携している大学もないわけです。そういう提携を結んで、同志社への留学・交流をしやすくすることが大切ですね。——最近、中国の大学とは提携が実現しましたから……。

嶋田 そう、そうして徐々にふやして行くことですね。キリスト教主義の立場から、人類は皆兄弟という認識のもとに国際主義を考えますと、なすべきことは沢山あるのです。

いま、朝鮮語のことを申しましたが、言葉は親善の初まりです。知らぬ他人を愛することはできない。わたしたちは相手の国をよく知る必要があるのです。過日オーストラリアの大学へ行って驚きましたことは、日本研究の講座を設けて、日本を知るための可成り高度の教育をやっていることです。それに比べますと、われわれの努力はまだまだ足りないのです。

同志社は、同志社ほんらいの使命にかんがみて、科目の再構成を考えてみる必要があると、切にわたしは思うのです。

——新島先生の講演の草稿の中に、「愛国とは愛人である。愛人は国の違い、民族の違いを越えて広がって行くものだ」という一節

がありまして、わたしは強い共感を覚えたのです。

嶋田 新島先生はあれだけ長く外国で生活をされた、外国人宣教師の力を借りて同志社を創立されたのですが、ついで外国人に屈することはありませんでした。そのインターナショナルイズムでは、同志社は、そして日本はどうあるべきなのか、その特殊性を見据えつつやられたのです。それは先生に人類の視野があったからこそ可能であったと思われれます。「ますます世界的に、飽くまで日本的に」それが同志社学風の本流でありたいのです。

——同志社のみ立場で申しますと、施設も不十分ですね。

嶋田 おっしゃるとおりです。上智や関学に比べても同志社は劣っている点があります。外国人宣教師に対する待遇もよくないのです。もっと国際的人物をお迎えして、連続講演をやっていたら、共同討議ができるようなセミナーハウスや宿泊設備を充実していかなければなりませんね。

——しめくくりとして何か。

嶋田 同志社は私学であり、私学のプライドを持って、その私学の特徴をもっともっ

伸ばしてゆくことを、みんなで心掛けてやっていきたいというのが、わたしの切なる願いなのです。それから、新島先生のお考えを現代的に翻訳し解釈していくことが大切なのです。時代を先導することなく、進歩の個性を磨かないで、大学形態の維持に汲々たらざるを得ぬ同志社、そこに問題があります。

一貫教育、学部の壁、国際主義などの見直しも、私学とは何であり、同志社の使命の本質は何であるかをしっかり認識して、その認識の上で立つてなされなければならないことなのです。そして、学生生徒を真の同志社人として鍛えていく、鍛えることの出来る先生を養っていく。これはまさに百年の大計で、これからの同志社は是非そのことを考えなければならぬのです。

——ご多忙のところを長時間、本当に有難うございました。

(一九八一年一月二日 嶋田名誉教授邸にて収録)

付記

嶋田名誉教授の業績や学説については、同名誉教授著『社会福祉体系論』（ミネルヴア書房 一九八〇年六月刊に詳しい）。

扉の漢詩二篇

現存する新島襄の詩歌は、日記に記されたものが多い。ついで書簡にあらわれる。厳密な照合をしたことはないが、同じ詩は、まず日記にはほぼ完成にちかひものが書かれ、推敲を加えて書簡に記されているように思う。

新島は書簡の人であるとよくいわれ、事実そのとおりにはないが、日記もじつに丹念に記す人であった。

扉の漢詩二篇は、彼の日記「漫遊記事」の明治二十二年十二月十九日、二十日の項に記されたものである。次のようによむのであろうか。

山を看るに高く巍々たり
海を觀るに濶く洋々たり
味い得たり造化の妙
小心少しく発揚す

○
徒らに公事を仮りて私慾を逞うす
愴慨誰か天下に先んじて憂えん
廟議定まらず国歩退く
英雄起らずんば神州をいかにせん

説明するまでもなく、新島は当時東京にいた。大学設立資金の募金運動ははかばかしい成果をあげえず、加えて教会合同問題での心労もあって、肉体の衰えはいかんともしがたかった。しかも条約改正問題の渦中での大隈外相の遭難や、内閣の辞職など、国の政治も暗澹たる状況にあった。

新島はふかく国を憂えるとともに、自らを励まし励まし大学設立募金運動を推進していたにちがいない。右の二篇の詩は、内憂外患の状況下にあった新島の心情をうかがうに足る作品だといえる。

なお、「看山」の詩について彼は、同志社生徒横田安止宛の手紙(明治22・12・30)にも記して、人に見せても不苦と書いている。(河野仁昭)